

第3回Jヴィレッジ復興プロジェクト委員会議事録

日 時 平成27年1月29日（木）10時30分～12時00分

場 所 福島県庁 本庁舎3階 土木委員会室

出席者 別紙出席者名簿のとおり

結 果

1 委員長あいさつ

- ・ 本委員会は、昨年5月に第1回を開催し、第2回の間接報告を経て本日第3回を迎える。その間、実務者からなるプロジェクトチームにおいて、8ヶ月間7回に渡り真剣な議論を重ね、今回「新生Jヴィレッジ」復興・再整備計画の案を示していただく。
- ・ 委員の皆様には、忌憚のない意見をいただき、計画をまとめたいと考えているので、よろしくお願ひしたい。

2 議案「「新生Jヴィレッジ」復興・再整備計画（案）について」

（1）事務局より資料について説明。

（戸田委員）

- ・ プロジェクトチームのリーダーとしてプロジェクトチームの検討経過を報告する。
- ・ プロジェクトチームメンバーの真剣な議論により、明るい将来のある計画案として取りまとめることができたと考えている。
- ・ 原状回復はもとより、新たな機能として、日本初となる1面規模の全天候型サッカー練習場や、コンベンション機能を備えた宿泊施設の新設等を掲げている。
- ・ これまで以上に、笑顔あふれる「新生Jヴィレッジ」が実現できるよう、メンバーの思ひをまとめている。

（事務局：資料「「新生Jヴィレッジ」復興・再整備計画（案）」について説明。）

（2）計画（案）の検討

（上田委員）

- ・ 良い計画がまとまったと思う。これを実現することは簡単ではないが、関係者で細かい部分を含め真剣に議論を進めていきたい。

（近藤委員長）

- ・ 5ページに記載の「プロサッカーチーム誘致の検討」について意見は。

（上田委員）

- ・ スタジアムの活用方法として有効だと思う。
- ・ 10～20年をかけての夢として、JFAアカデミーやふたば未来学園高校の子

どもたちがチームを作って活躍していくことも考えられる。地域密着で大人も子どもも、また、男女ともが様々な形で活躍できればよいと考えている。

(福井委員)

- ・ 県が中心となり、Jヴィレッジを復興させるという不退転の決意をしていただいたことに感謝する。
- ・ 再整備後は、県サッカー協会や地区サッカー協会、また、全国のファンを含めて再開後の利活用を支援していきたい。
- ・ 計画の内容にまとまりが出てきたと思う。
- ・ 2020年東京オリンピック・パラリンピックに向け、日本のスポーツ文化の意義はますます高まっていく。日本サッカー協会としてもできる限りの協力をしていきたい。

(近藤委員長)

- ・ 8ページの「指導者等の研修拠点化」について意見は。

(福井委員)

- ・ 現在、JFA登録選手は全国で約90万人、登録をせずにサッカーをエンジョイしている方も含めれば、日本のサッカー人口は数百万人に及ぶと考えられる。
- ・ トップアスリートの輩出に当たっては、個人の志や努力が前提であるが、指導者の役割は大きい。しかし、まだまだ指導者は不足しており、質を高めていくことも必要。そのためには、世界基準を学び取りながら日本のスタイルを作っていくことが重要である。
- ・ いつでも世界基準のトレーニングができるハード・ソフトを備え、指導者が集まって研さんするような環境がまだまだ日本には足りない。それをリードしていくのがJヴィレッジの役割であると考えている。

(穴戸委員)

- ・ 多くの知恵が集まったいい計画ができていると思う。
- ・ Jヴィレッジの再開が実現すれば、榑葉町・双葉郡の復興にとって相当な前進となる。広野町と連携して協力・支援を行い、様々な知恵を出して盛り上げていきたい。

(菅野委員)

- ・ 広野町の重要なシンボル施設であるJヴィレッジの復興の具体像が示されたことに感謝する。
- ・ 現在、広野町では長期計画の見直しを策定しているところであり、Jヴィレッジ復興のスケジュールと合わせて復興に向けた検討を進めたいと考えている。

(戸田委員)

- ・ 震災により、Jヴィレッジをめぐる環境はきびしいものがあるが、Jヴィレッジの再開が実現、運営されれば、地域や団体と一体となり、利用客に来てもらうこと

ができるのではないかと考える。

- ・ プロジェクトチームでは収支面の検討も行った。これまで取り逃していた部分についてしっかり収益を上げていくことで黒字化できる施設であると考えている。
- ・ 今後、運営体制を含め検討を進めたい。

(近藤委員長)

- ・ 収益の柱である宿泊機能とレストランに投資を行い、収益を上げていくことが重要であるとする。Jヴィレッジはサッカー・ナショナルトレーニングセンターの第1号として福島にできたが、全天候型サッカー練習場等の整備による魅力向上により、収益を上げていく、という理解でよいか。

(戸田委員)

- ・ 加えて、光熱水費削減のための再生可能エネルギー設備の導入や井戸の新設など、細かい部分も含めてコストの検討等を行っている。

(近藤委員長)

- ・ 全天候型サッカー練習場の魅力などについて意見は。

(上田委員)

- ・ イングランドのナショナルトレーニングセンターには、1面規模の全天候型練習場があり、視察したことがあるが、天候に左右されずにトレーニングできる環境は大変有効である。
- ・ また、指導者育成等の場面でも、人を集めてレクチャーしながら実技ができるようになり、非常に魅力的である。

(石崎委員)

- ・ 改めて、福島県の皆様にご迷惑をおかけしていることをお詫び申し上げます。
- ・ 素晴らしい計画を作っていただいたと思う。
- ・ 当社ではJヴィレッジを事故直後から廃炉のための拠点としてお借りしている。また、復興推進活動の拠点としても使わせていただいている。
- ・ きれいに直してお返しするのは当然であるが、プラスアルファの部分をもどくように加えていくか今後検討したい。会社がこのような状況であり、どこまでできるか考えなければならないが、ソフト面も含めて検討したい。
- ・ 昨年「応援企業ネットワーク」を立ち上げた。加入する現在30万人の関係者と、その家族も含めれば100万人の方がJヴィレッジを活用できるようなことを考えたい。
- ・ また、富岡町にある変電所を改造して、地域の復興に役立てたいと考えている。
- ・ イノベーション・コースト構想においても、宿泊機能は構想の構成要素の1つとなることから、構想への位置づけもしっかり行っていきたい。
- ・ 福島の皆様のお役に立つように進めていきたい。

(近藤委員長)

- ・ 再開後のJヴィレッジの利活用者を増やすうえで、復興ツーリズムの面からどうか。

(石崎委員)

- ・ 関東エリアを中心に学校にお願いをして、教育旅行にJヴィレッジを活用していただく取組みを行いたい。

(事務局：全天候型サッカー練習場及び新宿泊施設のイメージ図について説明。)

(近藤委員長)

- ・ これまでは、大規模大会時にJヴィレッジ周辺の宿泊施設を利用していたが、現状では宿泊施設のキャパシティが不足している。プロジェクトチームでコンサルタントを入れて議論した結果、増設室数には幅があるものの造成自体は必要であるということに理解している。
- ・ 新たなスポーツ競技の誘致について、Jヴィレッジではラグビー、アメリカンフットボールの合宿を以前から行っていた。今回、ボルダリングやスケートボードでの活用という案が出ているが、プロジェクトチームでの検討経過について説明願いたい。

(事務局)

- ・ ラグビーやアメリカンフットボールは天然芝へのダメージが大きいこと、サッカーグラウンドとゴールポストの形状が異なることから、人工芝グラウンドをラグビー等に活用できる形に整備することを考えている。ゴールポストを使用しなければ、天然芝も利用可能。
- ・ 2019年にはラグビーのワールドカップもあることから、もし使えるチームがあれば使っていただけるよう整備を進めたい。
- ・ ボルダリング及びスケートボードに関しては、広野町側の減容化処理施設跡地を活用して駐車場を整備するとともに住民や子どもが集まって楽しむことができ、また、今後の発展が見込まれるボルダリングやスケートボード施設の整備を検討したい。

(近藤委員長)

- ・ 檜葉町、広野町において地域活性化に向けた活用について意見は。

(穴戸委員)

- ・ 道の駅ならばやしおかぜ荘との連携により、観光や健康福祉のモデル地域になることができらばと思う。また、帰町に向けた取組みの中で特に重要なのは、子どもたちが戻れる環境整備であり、そうした面での連携も模索したい。
- ・ Jヴィレッジは日本有数のハイレベルな施設であるが、一方で地域住民が気軽に訪れることができる敷居の低い施設を目指してほしい。

(菅野委員)

- 広野町の二ツ沼公園は今年度中のフルオープンに向け準備を進めているが、特に先行オープンしたパークゴルフ場は震災前並みの利用がされており、Jヴィレッジの宿泊機能と連携したツアー企画などを行いたいと考えている。
- また、Jヴィレッジのフィットネスやプールを高齢者を含めた幅広い年齢層の町民の健康づくりに活用できればよい。
- 子どもたちにとって、自分の町にこのような日本一の施設があることは誇りにつながるものであり、イベント等の活用を積極的に行い、町の振興に活用していきたい。

(近藤委員長)

- 震災前は、Jヴィレッジで双葉地域イベント「ふたばワールド」を開催したこともあり、地域に密着した施設としての積極的に活用してほしい。
- 委員長として、石崎委員から提案のあった「教育旅行の誘致」に「復興ツーリズム」を加え、計画に追加することを提案する。
- 委員会として本計画を決定してよろしいか。

(各委員より、異議なしの声があり、計画の決定が承認された。)

4 委員長あいさつ

- 計画(案)の取りまとめに当たって、プロジェクトチームでは7回の検討会と視察調査を行い、喧々諤々の議論を経て、この計画ができていると聞いており、いい方向性の計画ができたと思う。
- サッカー・スポーツの力は大きなものであり、子どもたちや地域に元気を与えるものである。Jヴィレッジの復興が実現することにより、地元の楡葉・広野両町、双葉郡、ひいては県の復興が前進するものであると考えている。
- 現在廃炉の前線基地になっているJヴィレッジが見事に再生し、福島・日本の復興再生のシンボルとなることが、我々福島の矜持を示すことになる。
- 知事からは、県職員の心構えとして「ミッション・パッション・アクション」が示されているが、この計画も、Jヴィレッジを再開させ、本県復興のシンボルにするという使命「ミッション」、それを実現するための5つのチャレンジ「アクション」から成っており、また、それは委員及びプロジェクトチームの皆様の熱意「パッション」があってできたものであると考えている。
- 支援の輪を国や企業、Jヴィレッジに心を寄せていただける方々に広げていき、Jヴィレッジの一日も早い復興に努めていきたい。
- 本日がJヴィレッジ復興の第一歩であり、引き続き皆様の協力をお願いしたい。

5 閉会